

Aちゃんの中学校編入学を前に、今日は中学校での面談。ご両親も一緒に校門前で待ち合わせ。

単身来日し、難民認定された父親の日本語学習を縁あってお手伝いしてから10年近い年月が流れようとしている。念願かなって母国に残してきたご家族を呼び寄せることができたのはほんの数か月前。夢にまでみた家族そろっての日々。これまでのさらに何倍もがんばる父親。かつて当たり前だった華々しいキャリアは、今もこの先も望めそうにないけれど、少なくとも今、この地で、安全だけは約束されている。

教育熱心なご両親だ。子どもたちも来日以来ずっと待ちわびていた「学校」。親子で校門をくぐるその姿は、何年もの想いのこめられた実に厳粛なものだった。

さていよいよ面談開始。緊張の中、席についてご挨拶と自己紹介。そして、先生からの最初のご質問。

「いつまで日本にいますか」

難民に対する理解のなさ、配慮のなさ、しばし呆然。今後の学校での指導を検討するための、「ただの」質問なの

だろうと自分に言い聞かせつつ、「お父さん、怒って当然だけれど…。でも、やっぱり今は怒らないで…。」。恐る恐る父親を見る。

「神様が決めてくださいます」

父親が発したその一言の重さを、先生方はどんな風に受けとめて下さっただろうか。

縁あって日本に定住することとなった難民の方々から、「やっぱり日本に来てよかった」、いつかそんな風に言っていた日が増えてくれることを切に願う。そして今日も、喜怒哀楽に満ち溢れた日常が続いている。

社会福祉法人さぼうと21
学習支援室コーディネーター

矢崎 理恵



在住難民支援の現場から

インドシナ難民

1978年、日本は「インドシナ難民」の受け入れを開始しました。2005年の受け入れ終了まで、その数は11,319人にのぼります。「ボートピープル」として母国を離れ、日本に定住をした方々は今、高齢化という大きな課題を抱えつつあります。その一方で、今や親を、企業を、そして地域を支える貴重な人材も育っています。

条約難民

「政治的意見等を理由に迫害を受けるおそれがあり国籍国の外にいる者…」と定義される、いわゆる「条約難民」。保護を約束したこの日本という国の一員として、しっかり義務と責任を果たし、定住しようと必死です。「帰国」の選択肢はありません。1982年から2014年まで、難民認定者は633人、在留特別許可者は2,367人。「自分達は学校もキャリアも途中で手放した。でも、子どもにはそんな苦勞をさせたくない…」何度こんな言葉を耳にしたことでしょう。

第三国定住難民

5年間のパイロットケースが終了し、今年度から本格的政府事業となりました。母国を逃れ、難民キャンプなどで一時的な庇護を受けている難民が、受け入れに合意した別の第三国に移り住み、定住するという事業です。今年も9月末、6家族19名の第三国定住難民が来日し、すでに180日間の定住支援プログラムを受け始めています。2010年から受け入れた第三国定住難民は18家族86名。彼らはすでに、三重県、埼玉県、千葉県などで定住生活を始めています。キャンプとは大きく異なる環境での毎日がどれほど大変なものであるかは、想像に難くありません。

小平市国際交流協会と 日本語会話教室

小平市国際交流協会 菊池 哲矢



小平市国際交流協会は1990年12月に小平市が呼びかけて、国際交流の推進を図る中核的な市民組織として設立されております。私は設立段階では小平市職員として1996年3月まで担当し、退職後2011年4月から再度5年間事務局職員として関わらせていただいております。

当時の小平市では公民館事業として日本語教室が開催されていましたが、協会における日本語への取り組みは、当初、専門的なボランティアがいなかったこともあり、1992年1月からボランティアの提案で毎月1回、唱歌を歌うことで日本語を覚えてもらう取り組みでスタートし、毎回4～5人の外国の方が参加していました。本格的な日本語教室は1993年7月からで、週2回午前中に日本語教師の資格をもったボランティア10名がグループを組み、10人前後の学習者の日本語指導を担当していただきました。会場は毎回、公民館や福祉会館の会議室を借用していました。

同時に、資格は持っていないが、在住外国人の日本語支援に協力したいというボランティアを対象に8回の日本語教授法の講座を開き、修了者に希望する外国人とのマンツーマン日本語会話クラブをスタートしました。しかし、ペアごとに自分たちで公共施設のロビーなどの場所を確保してもらっていたため、継続ができませんでした。

その後、1996年2月に事務局が確保でき、月曜日と土曜日は午前中に保育体制を加えて開き、さらに仕事を持っている外国人のために金曜日の夜間教室も開いています。

現在まで、小平市国際交流協会の日本語教室は日本語教師の資格をもったボランティアが少人数制で学習指導をしていただいております。毎週天候や体調に関わらず、一定の時間帯にきちんとできていただいている指導されている責任感にはとても敬服しております。各

教室はそれぞれ独自に運営されており、教室間の情報交換を年に数回しています。また、ボランティアに欠員がでると市報で有資格者を募集しています。

なお、資格はもっていないけど海外で日本語会話の指導をしていたので、小平でもお手伝いをしたいという申し出も多々ありますが、お断りをして公民館などで独自に活動されているボランティアグループをご紹介します。

市民レベルの国際交流団体では、「教わる側」と「教える側」という関係性ではなく、対等の立ち位置で「お隣さん」として交流を介在した日本語学習の支援の取り組みが主流なので、当協会の場合は特異ですが、専門家集団と一般的な日本語ボランティア団体との役割分担ができれば、学習者が遠回りしないで日本語を身につけることができるのではないかと考えています。

市内には公民館などですでに5団体が日本語支援の活動が行われていましたが、こうした団体と協会の日本語教室をつなぐ試みとして、昨年小平市が主催して日本語発表会が始まっています。

また、今年は公民館事業として日本語ボランティア養成講座が行われた結果、修了者で日本語会話サークルがスタートするなど、あらたに2団体がたちあがりました。「多文化共生」という概念の主な取り組みはコミュニケーション支援ですが、「日本語」の占める位置は大きいです。現在、災害時対応として「やさしい日本語」の取り組みも始まっています。

日本語ボランティア活動では「場所の確保」と「事務局機能」が最大の課題ですが、当協会においては「専門家集団」という支えも加えて、極めて条件に恵まれています。今後とも、小平市全体で「日本語」活動が広がっていくことを願っています。

紀行記

2015 中国四川 国際文化観光祭に 参加して

まちだ地域国際交流協会

床呂 英一

●2015 中国四川国際文化 観光祭について

8月下旬に四川省等の招待で四川省までの航空券代だけ参加者の負担という表記の旅行に参加した。この観光祭は「中国四川省観光局&四川省宜賓市主催」のもので、招待された人は合計で148名、日本からは32名。旅行社社員、新聞社、日中交流団体会員などである。町田市の「日中文化交流市民サークル『わんりい』」にも招待があり、私は『わんりい』の会員ではなかったが参加した。私の町田市での所属団体「まちだ地域国際交流協会」の創立15周年記念講演会を2008年に実施した時に『わんりい』にもご案内し、13名ご参加いただ

いたことがあり、その後お付き合いが続いていたものである。

●観光祭の4日間に

多くの観光地を 自貢市恐竜博物館見学、宜賓市・五糧液工場、「万里長江第一古鎮」の「李庄」、興文県「苗族のお城」、「興文石海」。「蜀南の竹海」「酒の都劇場」などである。以下、観光祭について感想をお伝えしたい。

●感じたこと

- ①宜賓市の観光客誘致にかける熱意を感じた。街中には大きな観光祭の看板が立っている。また市民にも歓迎のムードを感じた。
- ②「李庄」を見学したときに、ちょっとした広場で中国人数人がダンスをしていた。中国人のおおらかさを感じた。
- ③スケールの大きさに感心した。「恐竜博物館」も大きい、「興文石海」は特にその大きさに驚いた。鍾乳洞は思わず息を呑む迫力があった。
- ④「蜀南の竹海」は、日本の観光地にイメージが近く、日本人よりも西洋の観光客の方により印象を与えるのではなかろうか。ただ「竹林の七賢」の像があり、内2人は囲碁を打っている像で、囲碁の好きな私には楽しめた。
- ⑤ホテルの設備はいい。また、各部屋に傘が置いてあり、雨天のときに貸し出されるようだ。
- ⑥四川料理に満足。辛いという定評だが、それほどでもないと思った。鹿肉を

食べたときは辛いと思ったが、2枚目の肉は辛さを感じなかった。辛いと思って慣れちゃうのだろうか。旅行前に四川生まれの中国人に「四川料理は辛くて油が多いので、お茶をたくさん飲むと良い」と聞いていたのも役立つ。



また、食事はバイキング形式がほとんどであったが、果物に特色がある。メロン、葡萄などのほかに、龍眼、なつめ、ドラゴンフルーツがいつもあった。

- ⑦日本からの招待客の中に印象に残る中国人女性がいた。アジア太平洋観光社の社員であるが、滋賀大学大学院の学生であった時にアルバイト代で費用を作り、一人で取材、編集をして「和華」という機関誌を発行した。今は相当数のボランティアが支援し、「日中交流和華会」という組織で発行しているようだが、日中草の根交流にける熱意に敬服した。
- ⑧私は中国語を勉強していないので、中国人と中国語で話しができなかったのが残念である。『わんりい』からの他の3人は中国語ができるので積極的に中国人に話しかけていて羨ましかった。

また参加者の一人は次のようなことを言っている。「李庄では、挨拶ただけで『ニーハオと言った!』『笑った!』と大喜びしてくれる素朴な人々とも出会った。ミャオ族の若い女性達に『国に帰りたくなくなっちゃった、どうしよう』と半分冗談半分本気で言ってみたところ、『じゃあ、帰るのはやめて、ここで私たちと一緒に暮らしませんか』とのお誘いが。」と。

- ⑨晩餐会の席で次のようなことがあった。中国人の二人が私のテーブルに美酒・五糧液の瓶を持って回ってきた。私は自分の小さな杯の酒を飲んだが、その時に『わんりい』の会員に「一人先に飲むのではなく一緒に飲むのがマナー」と教えられた。マナーについても勉強しておくべきだった。



李庄で

いっしょに理想を探そう

日本語教師 金子 広幸

先日N市の多文化共生センター主催のブラッシュアップ講座で講演をする機会がありました。テーマは学習者の日本語をどう変えるかということでした。支援をされている皆さんがいかに様々な問題を抱えているかが浮き彫りになって興味深かったのですが、以前F市の国際交流協会でした講演と同じように「事例」を集めて、私も含めた参加者全員で、解決策を模索するという方法をとりました。私は1回目の講演後に、参加の皆さんが提起してくださった事例を持ち帰ってコメントを書き、2回目の講演では、新たに出された事例それぞれに、支援者同士がコメントし合いました。

「小学生の子どもなのだが、本人は日本語をやりたくないと言っている」

「日本語能力試験のN1に合格しているのだが、あまり話せない。発音も直して、話せるようにしてあげたかったのに、結局あまり成果が上げられなかった」

「いつも助詞が抜けてしまう。「わたし、ごはん、たべる」になる。」

『こんなときどうしたらいいの?』と問いたくなる具体的な課題満載の講演となりました。

また、支援を続けて行く上での悩みも飛び出しました。「支援者として日本語の能力をアップさせるためにはどうすればいいのか」という問題提起でした。

いろいろな人が書いた本を読む、言語学的知識・文法知識・古典・日本事情など情報は広く取る、支援者も理想を持ち自分のスタイルの日本語を持つ。ペン習字やパソコン・簿記検定なども役立つ、などいろいろな意見が出ました。

皆さん、熱心なご参加をありがとうございます。N市の皆さんが探しているもの、それは「理想」ですね。

支援の場での出会いで、学習者の抱えている課題の多さに『この人の日本語どうしよう』と思われた方も多いと思います。そんなとき私がお勧めしたいのは「理想探し」です。

私の日本語クラスの学生たちも同じです。私は教師ですので、任務として学習者の抱えている問題を解決しなければなりません。学習者にはいくつものタイプがあって、大別すると次の4つのタイプのどれかに当てはまります。

【Aタイプ】

気にしない

【Bタイプ】

気にはしているがなかなか直らない

【Cタイプ】

とても気にしているが、直す機会がない

【Dタイプ】

とても気にしていて、自分で直せる

A、Bの人たちにはまず自覚を促したいですね。最近では手元のスマホでも「録音・録画」が簡単にできますよ(Aの人には効果的です!)。練習しているところを録音・録画して一緒に視聴するのです(大丈夫です。恥ずかしいのは1人じゃないので笑)。Bの人はAより傷つきやすいので対応は優しく。そして、どちらのタイプにも理想について聞いてみましょう。

Dの人には全く言うことがありませんね。その人の進捗を見守ってあげれば良い状態です。

残るはCです。録音録画は逆効果です。ただでさえ気にしているのにそんなことをしたら泣いちゃうかも。私は先に「目の前の」理想探しをしております。そしてそれに向かって「疑似練習」をするのです。目前にある具体的な現場を想定してもらい、その場で達成できるその学習者なりの解決策をとともに探します。そしてその過程でふりかえりを積み重ねます。

ここでひとつご提案です。「理想像





マップ」ができればいいですね。学習者と向き合って話すのは大変ですが、「半年後」「1年後」…「5年以降」に、「どんな日本語をどこで使えるようになっていくか」を話すのです。記録は、文章よりキーワードで記しておきましょう。

Dの人にはこの方法がとても大きな意味を持ちます。その人は「理想像マップ」を大事に持ち続け、それをビジョンに変えて、実現していくでしょう。

泣きそうなCの人には、自分の理想探しが終わって、ある程度落ち着いて来たら、未来志向の「理想像マップ」を作ってもらいましょう。

地域の日本語支援の場でよく聞かれるのが「成績がないので能力が証明できない」ということです。はなから成績など要らない人が多いので、無理に付ける必要はないのですが、それでも、成果はできるだけ残しておきたいものです。

私はそんなとき、「学習成果物」を保存できるようにしています。クラスの宿題やみんなで作った作品、グラフ、スライド、録音など保存できるようにしておくのです。本人に保存する意義を伝え、希望すればですが。

私の初級のクラスですが、タスクシートなどを作るときに、必ずA4にして、同じファイルにとじられるようにしています。

節目に、蓄積したものを概観すると、学習者自身が自分の成果をふりかえることもできるし、他の人もその学

習者がどんな道をたどってきたか想像できるのです。これを「画集」に見立てて「ポートフォリオ」と言います。

さて、理想探しに戻りますが、「日本人がこう言うからそう言いなさい」というのは、多く説得力を持ちません。あくまでも探すのは「その学習者にとっての理想」です。言語の学習者の中には「ネイティブ崇拜」があるらしく、目を少女漫画の主人公のように輝かせて、「木村拓哉のように話したい」などと言い放ち、ファッションまでまねして実現した人がいましたが、「あんなふうな話し方ができたらいい」と理想を持つことは大切です。

さらに、理想という言葉には「スタンダードで正しい」という印象がありますが、ここで探すものは「正しい日本語」ではありません。ここでも目指すは「その学習者にとっての理想」です。

以前、ボランティアさんに絶大な人気のあった学生さんがいましたが、実は彼女は若い人の中では「浮いた存在」でした。周りの日本人に聞いてみると「だって～彼女が話す日本語が馬鹿っ丁寧すぎちゃって～」との反応。いまだき「ぜんぜんだいじょぶ」を言わない大学生なんていないでしょう？「それは正しくない日本語です」とどこかで言われてきたんですね。かわいそうに。

理想の姿が支援者に想像できなかったらどうしましょう。

以前「子どもの保育園のママ友の会話についていけない」と言っていた学習者がいました。こんなときには…、演技力でカバー?! それは無理ですね。いくらなんでも50代男子の金子には「ママ友」の会話の再現は非常に難しいです。

それなら、広く見識を持つ?! それも一朝一夕ではなかなか…。

だとしたら立ち位置を変えませんか。学習者自身に、信頼できる「ママ友」を探してもらって、協力を頼み、その学習者も含めた会話の様子を録音してきてもらったらどうでしょう。一緒に聞いて問題解決をしながら「理想探し」をしましょう。

学習者に向かい合って「教える」のではなくて「いっしょに探す」のです。

2020年東京では世紀の祭典が開催されます。開催期間は短く、その前後の準備で来る人などを含めても、留学生や長期滞在している外国人市民の皆さんとは異なる日本語が求められるでしょう。観客として来日する人は「観光」「買い物」に必要な日本語も求めているでしょうから、その人たちの「理想」としていることがどんなものなのかは想像に難くありません。

まず「理想探し」。これをお勧めします。

■「JCA千歳船橋」のご紹介をさせていただきます

JCA千歳船橋 (世田谷区)

平成27年度 会長／志水 功夫

◆創立／1983年数人の女性が、当時千歳船橋にあった「世田谷ボランティア協会」で外国人の日本語学習のお手伝いを始めた。その後「玉川ボランティアビューロー」で活動を始めた「JCA玉川」とは姉妹関係にある。

◆目的／世田谷の各地域に在住、滞在する外国人に、日常会話の支援と日本の生活習慣の情報を提供し、楽しく日本で生活して頂く。

◆組織／会員(ボランティア)、学習者(外国人)で構成し、運営は会員が分担して従事する。

◆授業／会員と学習者が原則1対1で

一回90分、日本語で会話や学習をする。

◆運営費／会員は年間1,000円を負担し、学習者は1ヶ月500円を負担する。

◆教室／全8教室(月曜午前、火曜午前、水曜午前、金曜午前、木曜午後、水曜夜、木曜夜、金曜夜)で、会員、学習者共に各約120人が活動している。

◆イベント／各教室を横断する行事が年に2回ある。①おしゃべり広場(学習者を主体に、会員が準備をし、秋に交流会を開く)②日本語講習会(会員用に、春に講師を招き3時間位を3日間、文法・教え方を学習する)

◆広報／会報「風また風」を発行、ホー



ムページ「JCA千歳船橋」

◆一会員としての感想／「外国人の役に立てる」、これは素晴らしいと思入会を考える。決まり文句は「英語が苦手でも会員になれる」だった。入会したのが平成21年1月。一番の収穫は「外国人も人としての考え方は一緒だ」という当たり前のことだった。質問されて、微妙な日本語を説明したり、分かりにくい文法を説明したりして、理解してもらった時は良かったと思う。充実している教室での90分である。

会員団体紹介

Nice to Meet You

TIC田無日本語教室は毎週水曜日午前10時から11時半まで、田無駅近くの西東京市役所等で活動しています。学習者のほとんどは主婦ですが、学生や地元で働く男性もいます。出身国は中国、韓国を始め、最近ではベトナムやレバノン、リトアニアなど国際色豊かです。

年に2回程茶話会を開きます。故郷の国や名前の由来などテーマを決めて、楽しくおしゃべりします。日本文化を紹介するだけでなく、学習者の国のことを知ろうとスタートした文化交流会。今年はブラジル料理講習会を行いました。ブラジル料理が初めての人もいて大好評でした。毎年、新年会は料理を持ち寄り、学習者の家族も一緒に祝います。いろいろな国の料理に舌鼓を打ちながら、イベントやビンゴで盛り上がり

■共に楽しく 寄り添って

TIC田無日本語教室 (西東京市)

平成27年度 代表／岸 明美

ます。教室では見られない皆の一面が垣間見えます。3年前からは夏休みに書いてもらった作文を文集にしています。日本人顔負けの作品もありますヨ。

今年は、ある学習者が夢だったNHKのど自慢に出たいと言い出し、選曲や衣装選び、応援とスタッフ共々大奮闘。甲斐あってTV出演は果たしましたが、結局鐘二つ。でも本人の夢を追いながら、私達も日本の国民的番組に陰ながら参加できました。

1992年、地域の外国人のために当団体の前身が発足した時は夜間の活動でしたが、希望者が増え、昼間の教室も誕生。今年度から昼夜独立し、名称も改め、再出発しました。現在スタッフ13名、学習者20数名。入門・初級レベルの人も多くマンツーマ

ンが望ましいのですが、N1・N2取得後も実力を高めたい人もいて、スタッフ不足の中、対応に苦慮しています。学習者のやりたいことも、検定対策や読み書き、会話など様々です。日本語教師の資格を持つスタッフは僅かですが、皆、学習者の要望に合わせて、市販の本だけに頼らず、手作りの活動を心掛けています。今後も学習者と向き合い、寄り添って共に歩んでいきたいと思ひます。



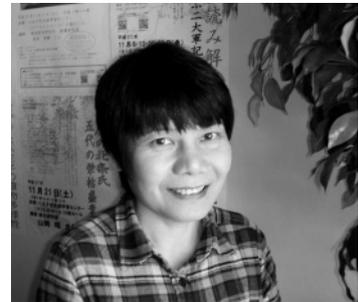
学習者の声

あこがれの日本に
やって来て…

松本チットラダ／タイ
八王子国際友好クラブ（八王子市）

交番につれていかれたこともありまして。だんだんさびしくなって、こわくなって、日本に来た時の夢がすっかりなくなってしまいました。なみだがあふれてきました。娘が生まれましたが、ひとりで育てなければならず、いろいろなことがとても心配でした。生活をしていくことが不安になりました。そんな中、近所に住んでいた、日本の友達が私の力になってくれました。私があった日本人の皆さんは、とっても親切にしてくれて、いつもあたたかく見守ってくれました。

日本人の皆さん、先生方、スタッフの皆さんが私たちのためにいっしょけんめい日本語を教えてくださいました。私は日本人の皆さんが大好きです。今までのことはずっと忘れません。私は、皆さんのおかげで勉強できたことを誇りに、うれしく思っています。今まで、本当にありがとうございました。



皆さん、こんにちは。
私は、松本チットラダと申します。
私はタイのチェンマイで生まれました。私は日本のテレビに映る日本の美しい桜に心をうたれました。「なんて美しいのだろう。私はいつか日本に行こう。絶対に行こう。」心に固く決めました。私にとっては日本はあまりに遠いあこがれの国でした。
そんな私におもいがけないえんがあつて、28歳の時、日本の男性とけっこんすることになり、あこがれの日本にきました。思っていたとおり桜がきれい、雪もきれい、きぼうにもえていました。その時、私は日本語がぜんぜんわかりませんでした。日本語の本を読むことができませんでした。そして初めての外国生活になれるのがむずかしく、ことばもあいさつでいじか知らずに日本にきました。主人はいつも仕事がいそがしくて、会話があまりできませんでした。病気になっても病院がわかりません。道にまよっても聞くことができません。

ボランティアの声

田中卓
八王子国際友好クラブ（八王子市）

外国人も参加する
ボランティア活動

私は「八王子国際友好クラブ」(HIFC)というボランティア団体で外国人の日本語学習支援や外国人と一緒にいろんなイベントに参加し、活動をしています。

HIFCは設立以来28年が経ち、現在の会員数は約170人。毎年、会員の入退会があります。外国人会員は常に入れ替わり、日本人も入会される人、特に男性は多くが社会の第一線を退いた人々、女性も最近では男性と同じような方が多くなっています。

一方で設立初期から活動をはじめ、現在も現役でHIFCの指導的な役割を担っている方（ほとんど女性）もたくさんおられます。外国人会員の中にも長年HIFCでボランティア活動をしている方がおられます。

例えば、Hさんは23年前に日本人との結婚を契機に韓国から来日、日本語が全く分からない状態で八王子に住み始め、HIFCなどで日本語を猛勉強し、日本語能力試験に合格後、日本語教師養成講座

も受講しました。そして10年ほど前からHIFCの日本語教室で外国人の学習支援をしています。

またRさんはミャンマーから7年前に来日。現在、日本語能力試験N1合格を目指して日本語を学習中。家事をこなしながらHIFCの交流グループで企画・運営にも参加しています。今年、Rさんのミャンマー紹介がきっかけで日本人会員が3か月間、ミャンマー現地の日本語教室で日本語指導をしてきました。この他にも日本人と同じ立場でHIFCの活動に参加している外国人がおられます。

このような外国人と一緒に活動できることは、私たち日本人ボランティアを心から勇気づけてくれます。このような外国人の活動が、彼らの居住地域でも広がっていけば、まさに多文化共生といえますか、外国人が安心して、楽しく暮らせる八王子市になるのではないかと思います。

◎「国際化市民フォーラム in TOKYO」が開催されます

主催／東京都国際交流委員会 国際交流・協力TOKYO連絡会

- | | | |
|---------------------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------------------|
| ◆日時／2016年2月21日(日)
午前(10:00~12:30)
午後(13:30~16:00) | <第1分科会>
多文化共生社会と国際協力の係わり方 | <第4分科会>
地域における多文化共生社会の充実とは(自治体と国際交流協会の役割分担) |
| ◆場所／東京ウイメンズプラザ
(渋谷区神宮前5-53-67) | <第2分科会>
多文化共生の地域づくり | 詳細は12月中旬頃 東京都国際交流委員会のホームページに掲載されると共にパンフレットが配布されます。 |
| ◆テーマ／多文化共生社会の推進 | <第3分科会>
コミュニケーションの充実(やさしい日本語での情報発信) | |



TNVN 東京日本語ボランティア・ネットワークはボランティア日本語学習支援活動を行っている団体のネットワークです。TNVN の会員はそれぞれ地域での日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人などを、隣人として支援しています。TNVN は会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

募集!

◎TNVN事務局のスタッフとして お手伝い頂けませんか

会員の皆様にはTNVNの活動にご協力・ご支援をいただいています。心からお礼を申し上げます。

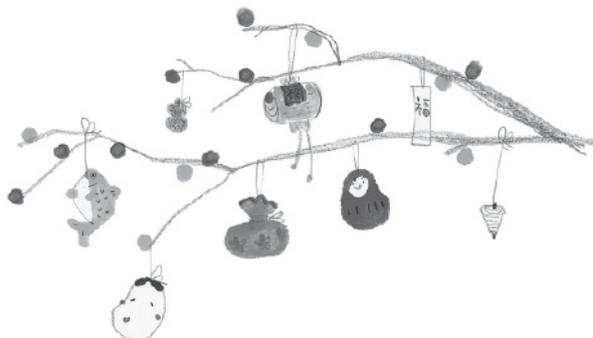
事務局は毎週金曜日14:00~16:00に開き、ボランティアスタッフが交代で詰めています。スタッフは地域のボランティア日本語教室で活動している方々です。

事務局では定常な事務処理やボランティア日本語教室についての相談で訪れる方への対応をしています。

また、「TNVN Network

News」を3ヵ月毎に発行し、このために全スタッフが集まり作業をします。作業のかたわら、和やかな雰囲気の中で日頃の活動状況や情報を交換しています。

TNVNの活動に関わってみようと思う方、一度、気軽に事務局へ見学にいらしゃいませんか。お待ちしております。



column

日本の一番長い日

今夏、八月十五日は七十回目の終戦の日でした。この日は色々な言い方があります。「日本の一番長い日」、当時をおぼえて居る人は、きっと実感出来る呼び方でしょう。私は十三歳の夏でした。

上海から緊急疎開して、母の実家(柏崎)にいました。昭和二十年八月十五日、その日は夏の太陽がカンカンに照りつけてすごく暑い日で、部屋の中でラジオをかこんで玉音放送を聞き、母や祖母たちのすすり泣く声を呆然と聞いていました。

今夏上映された映画であの日、どんな事が日本の中、特に皇居周辺で起きていたのか、陸軍、海軍、内閣そして宮内庁、くわしく映像化されて、十三歳のとき体験した事柄が肉付けされ思い出されました。

私の年代は、日本が民主化に舵を取る転換

期から今迄を見続けている訳です。戦後七十年、あの頃をおぼえている人が少なくなり、当時を話題にしてもはっきり話せる人がほとんどいません。

国会でもきっと同じなのでしょう。安保法案をなんとしても可決しようとする人たちは多分あの日を知らないのです。

「日本の一番長い日」もう銃を持って戦争はしたくない!! 戦争は嫌だ!! と日本中が決意した日です。

国際交流の一端を担う者としては、銃ではなくて、「心でなんとか平和を」と願うのは無理なのではないでしょうか。今夏の国会は、情け無いの一語です。野党が力を合わせて廃案にすることを念じています。そしてもう一度考え直して欲しいのです。老人の戯言でしょうか。

練馬 小川伶子

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日時：毎週金曜日午後2時~4時
第5金曜日/休み

◆場所
東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線-出口B2b)飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10F ロビー

◆日本語ボランティア相談窓口
日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えています。メール・電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えしています。ご意見もお待ちしております。

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

◆TEL: 03-3235-1171

(呼出: 金曜日活動時間帯のみ)

◆FAX: 03-3235-0050

◆E-mail: webadmin@tnvn.jp

◆URL: http://www.tnvn.jp/

◆郵便局払込

口座番号: 00100-1-719259

加入者名: 東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員数(2015年11月13日現在)

正会員 86団体

個人協力会員 16名

団体協力会員 1団体

賛助会員 4団体

◆編集 / 大木千冬、岡田美奈子、小川伶子、梶村勝利、床呂英一、林川玲子、山本英子

◆レイアウト / 鶴田 環恵